

## ルカによる福音書23章26-56節 「十字架に出会った人々」

### 1A 十字架への道 26-31

### 2A 十字架上での「救い」 32-43

#### 1B 赦しのための祈り 32-38

#### 2B 最後の救い 39-43

### 3A 全うされた使命 44-49

### 4A 新たに出てきた弟子 50-56

## 本文

ルカによる福音書 23 章を開いてください、私たちはついに、イエス・キリストの十字架の場面に入ります。以前から申し上げているように、四つの福音書にそれぞれ、同じ出来事が記されていますが、それぞれの著者の視点があります。ルカにおいては、イエス様が十字架への道、そして十字架においても、いや十字架後においても、その人生の使命を全うされることから、目を離さなかったことです。私たちは前回、十字架刑の判決をピラトが下すに当たって、そこに群がる者たちの闇の部分、その蠢いているもの、それらが私たち人間の闇の部分を書し出していることを学びました。そのような理不尽なことが起こっても、なおのことそれは神のご計画の中にあることを学びました。

### 1A 十字架への道 26-31

そして今、十字架を担ぎながら、ゴルゴダの丘まで連れて行かれます。そこで出会っていく人々に対しても、主は影響を与え、ご自分の使命を全うされています。

23:26 彼らは、イエスを引いて行く途中、いなかから出て来たシモンというクレネ人をつかまえ、この人に十字架を負わせてイエスのうしろから運ばせた。

イエス様が十字架を担ぎながら、歩かされています。この時点で、鞭打ちの懲らしめをイエス様は受けており、その衝撃はとてつもなく強く、鞭打ちになった囚人ではショック死する人も少なくありません。そのためイエス様は、極度の疲労と体の痛みによって、その十字架を担ぐことさえできなくなりました。そこでローマ兵が、「いなかから出て来たシモンというクレネ人をつかまえ」とあります。クレネというのは、北アフリカの地中海岸のギリシヤ時代から植民都市で、ローマ時代にも栄えていたところでした。「いなか」とありますが、エルサレムからはるかに遠いということで、クレネ自体は田舎ではありません。今は、そこは世界遺産に国連によって登録されており、リビアの中にあります。折しも、今年二月、21 人のエジプト人クリスチャンがイスラム国によって斬首に遭ったのもその場所です。ここからユダヤ人であるシモンは、過越の祭りを祝うためにやって来たのです。

ローマ兵によって命じられたことは絶対です。シモンは、とんでもない目になったとおそく思ったことでしょう。けれども、次に「十字架を負わせてイエスのうしろから運ばせた。」とあります。シモンは、イエス様の歩かれる姿をずっと見ていたことになります。後ろに下がってイエスを見るということについては、イエス様がペテロに、「下がれ。サタン。(マタイ 16:23)」と言われたことを思い出します。イエス様がわたしは苦しみを受け、殺され、三日目によみがえると言われた時に、ペテロはイエス様の前に出ました。そこで、「下がれ。」と言われたのです。そしてイエス様は、「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。(マタイ 16:23)」と言われました。私たちキリスト者は、ともするとペテロのように、人間のことを思ってそれで神の命じられていることさえ、遮ろうとします。それは、どんなにもっともらしく見えてもサタンの仕業です。私たちはイエスの後ろに下がるのです。

それで、イエス様の後ろにシモンが十字架を背負って歩いていました。私は、その身が震えるのは、ここまで極度な衰弱状態で歩くのが精一杯なイエス様ですが、この男シモンに限りない影響を与えたのです。マルコによる福音書には、彼が「アレキサンデルとルポスとの父(15:21)」とあります。初代教会における名の知れた人であると考えられますが、ローマ 16 章 13 節には、「主にあって選ばれた人ルポス」と言っています。もしかしたら、同一人物かもしれません。そして使徒行伝 13 章 1 節を読みます。「さて、アンテオケには、そこにある教会に、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた。」ここの「シメオン」はシモンと同名です。彼自身が教会指導者の一人となっています。

自分は一体そこまで主を信頼しているのか？と思います。たとえ自分が例えば衰弱して、何もできなくなったとしても、それでも人々が自分を通して主を見て、良い影響を受けるのか？ということです。自分は、何をすれば主を示すことができるのかということに注目してしまっていますが、何もできない時にそれでも主ご自身が人々に大きな影響を与えるという、そこまでの主への信頼です。

23:27 大ぜいの民衆やイエスのことを嘆き悲しむ女たちの群れが、イエスのあとについて行った。  
23:28 しかしイエスは、女たちのほうに向いて、こう言われた。「エルサレムの娘たち。わたしのことで泣いてはいけない。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのことのために泣きなさい。23:29 なぜなら人々が、『不妊の女、子を産んだことのない胎、飲ませたことのない乳房は、幸いだ。』と言う日が来るのですから。23:30 そのとき、人々は山に向かって、『われわれの上に倒れかかってくれ。』と言い、丘に向かって、『われわれをおおってくれ。』と言い始めます。23:31 彼らが生木にこのようなことをするのなら、枯れ木には、いったい、何が起こるでしょう。」

ルカ伝においては、女たちが多く登場しますが、ここの箇所もルカ伝にしか見ることのできないものです。女たちがイエス様のために嘆き悲しんでいます。しかし、イエス様は「あなたたちが、泣かなければならないのです。」と言われました。なぜか？それは、30 節ですが、ここの言葉は終わりの日の患難のことを指しています。その時に生き残っているユダヤ人が、その患難があまりにも酷く、神の怒りに耐えきれなくなり、「われわれの上に倒れかかってくれ」と叫んでいるのです。イ

ザヤ書 2 章 10-22 節にその様子が書かれているし、黙示録 6 章では、小羊が第六の封印を解いて大地震が起きました。その時に彼らが叫びます。「16-17 節 山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」

おそらくイエス様は、その世の終わりの型となる、紀元 70 年のエルサレムの神殿破壊のことを言われているのだと思います。その時に、包囲されたエルサレムの中にいた女たちは、あまりにもの飢えで自分たちの赤ん坊を食べました。この悲惨を話しています。そして「生木」というのは、イエス様ご自身です。イスラエルのメシヤであるイエス様は、命ある木としてご自分を例えておられます。旧約聖書に、イスラエルを木に例えているところがあります(エゼキエル 21:6-7)。そして、枯れ木とは命のないイスラエル、メシヤのいないイスラエルのことです。イエス様が生木であり、彼らがそのようなことをするなら、神は枯れ木に対しては、もっと大きな裁きを与えられます。

女たちに対して、イエス様は気にかけておられるのです。そして彼女たちに、ご自身がキリストであることを証しておられます。女の人たちが、イエス様が今、苦しみの中にいて必要を持っておられると思って女たちはやって来ているのですが、実は彼女たち自身がイエス様を必要としたのです。他の人たちを助けようとしながら、実は自分自身が、助けが必要だという場合です。何かに駆り立てられるようにして助けよう、救おうとするとき、実は自分自身が助けられなければいけない存在です。この女たちを見て、そのような姿を見ます。

## **2A 十字架上での「救い」 32-43**

そして、イエス様は十字架に付けられます。ここにおいて注目していただきたい言葉は、「救う」という言葉をいろいろな人が使っていますが、どのような意味で使っているかを見ることです。

### **1B 赦しのための祈り 32-38**

23:32 ほかにもふたりの犯罪人が、イエスとともに死刑にされるために、引かれて行った。23:33 「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとりには右に、ひとりには左に。

「どくろ」というのが、ゴルゴダとも言われるところで、ラテン語の翻訳で「カルバリ」とも言われています。

23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

何をしているか分からない、そのことに基づいて、イエス様は彼らを赦してくださいと願っておられます。これは、驚くべき祈りであり、神の愛の祈りです。イザヤ書 53 章 13 節に、「彼は多くの人

の罪を負い、そむいた人たちのためにとりなしをする。」とあります。誰か自分と利害関係のない人のために祈ることも、私たちには力が要ります。「誰々さんが救われますように。」と祈れることも、時々怠ってしまいます。ましてや、自分に背いている人、反抗している人たちのために執り成せるでしょうか？しかし、キリストを信じる者は聖霊の力によってできるんですね。ヘブル書の著者は、「ヘブル 12:3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。」

そして、もう一つ驚くべきことは、十字架の上の激しい痛みの中でこの働きを行なわれています。イエス様のガリラヤから始まった宣教の働きは、実にエルサレムの、この十字架の上でも行われていたということです。先ほどからシモン、女たち、そしてここで反抗している人々、それぞれの必要のためにイエス様は働きかけをなされています。

23:35 民衆はそばに立ってながめていた。指導者たちもあざ笑って言った。「あれは他人を救った。もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」23:36 兵士たちもイエスをあざけり、そばに寄って来て、酸いぶどう酒を差し出し、23:37 「ユダヤ人の王なら、自分を救え。」と言った。23:38 「これはユダヤ人の王。」と書いた札もイエスの頭上に掲げてあった。

十字架に付けられているイエス様、そして囚人たちと共に並んで十字架に付けられているイエス様、彼らが罵っている「救い」は、もちろんその十字架から降りてくるという意味ですね。しかし、イエス様はそこに救いを抛り頼みませんでした。十字架から降りてくることなど、いとも簡単にできるのです。しかし、それを敢えて行わないというところに、むしろ勇気があり、愛の力が働いています。ワーシップの歌で、「弱さの中にも、あなたの力が、私の全て。イエス、神の小羊よ。」とあります。私たちが弱いところに敢えて留まるということは、勇気が要ります。自分の力でいくらでも、その弱さから抜け出すことができます。しかし、自分ではなく主に抛り頼む、そして主が救ってくださることを信じる。ここにこそ、神の力が宿るのです。

## 2B 最後の救い 39-43

23:39 十字架にかけられていた犯罪人のひとりはいすに悪口を言い、「あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え。」と言った。23:40 ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。「おまえは神をも恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。23:41 われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」23:42 そして言った。「イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、私を思い出してください。」23:43 イエスは、彼に言われた。「まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」

犯罪人が二人かけられています。他の福音書によると、二人がどちらもイエスを罵った、とあります(マタイ 27:44)。こんな近くにいる人たちまでが、自分たちが何をしているのか、何を言っている

のか分かっていません。罵りなど口から出る悪意は、瞬く間に空気感染するようにして人々に広がります。そして犯罪人の言ったことは、他の者たちの「救え」と同じく、十字架から降ろせ、ということでしょう。ところが、一人が気づきます。初めに罵って、おそらくイエス様の姿を見て、気づいたのでしょう。

彼は第一に、「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。」と言っています。彼は、そこから救われようとせずに、むしろ今、受けていることはその通りであると、その裁きを甘んじて受けています。これが、神の救いに至るための第一歩であり、へりくだることそのものであり、しかし、ここに不思議な御霊の働きがあります。自分が受ける報いは甘んじて受けているのに、それでも不思議に神に受け入れられるという安心があるのです。なぜなら、報いを受けても、その後で御国の位にイエスが着かれる時に、そこで覚えていただけるという期待がかけられているからです。

神の裁きをそのまま、受け入れることのできた者で、ダビデがいます。彼の祈りは、「詩篇 51:4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告されるとき、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。」でありました。彼は裁きを受け入れているのに、それでもこのようにして神に祈ることができている、つまり、神にゆだねているのです。そして神にゆだねられているというのは、神がどこかで私を知っておられるという安心感があるのです。他人を裁いて、自分自身を見られない人々に、使徒パウロは次のように言いました。「ローマ 2:4 それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」神の慈愛が、すでに神の裁きの中においてさえ、受け入れられています。そこに悔い改めが生じるのです。

そして、この裁きの受け入れがあって、初めてイエス様をお願いします。「あなたの御国の位にお着きになるときには、私を思い出してください。」と言っています。イエス様が確かにキリストであり、王であることを認めています。そして王であるなら、特赦も出すことはでき、それで罪の赦しをここでお願いしているのです。そしてこの犯罪人は、自分もイエス様もすぐに死ぬことは分かっていますから、確実に、死者の復活も信じています。死者が復活し、その後の御国にキリストが着かれ、そこで罪も赦されて、自分も御国に入ることを願っています。

ところで、彼が願っているのであり、要求していないことに気をつけてください。他の人々は、「救え」と要求していました。しかし、彼は願っているだけです。ここにイエスに自分のことを決める権威を持っておられることを認めています。救いを得ることは、権威に服することです。そして権威に服する人は、安心と平和を見つけます。嘆願はしますが、要求はしません。神に対して、また人に対して同じです。

そしてイエス様の、この犯罪人に対する答えが彼の願い以上のものでした。「まことに、あなた

に告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。」であります。パラダイスとは、日本語で「樂園」ということです。旧約聖書では、エデンの園のような樂園のことを指します(イザヤ 51:3)。主が地上において御国の位に着かれる前、主が昇天されてからの天を表しています。パウロが、「第三の天」とパラダイスのことを呼んでいます(2コリント 12:4)。そして黙示録 2 章 7 節では、そこが天のエルサレム、究極の神の住まいを表しています。こうして、イエス様は死なれる時に、一人の人を確実に救いへと導かれました。

### **3A 全うされた使命 44-49**

23:44 そのときすでに十二時ごろになっていたが、全地が暗くなって、三時まで続いた。23:45 太陽は光を失っていた。また、神殿の幕は真二つに裂けた。23:46 イエスは大声で叫んで、言われた。「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」こう言って、息を引き取られた。

イエス様が、これほどの苦しみ、罵りを受けながら、なおのこと揺らぐことなく、最後までご自身の使命を果たしたのは、どこにあるのでしょうか？それは、ここの最後の言葉にあります。「父よ。」とまず、イエス様は言われています。先の祈りにも、34 節、「父よ」と呼びかけておられます。父としての子の信頼、また従順がここに表れています。イエス様は実に、12 歳の時にも、「わたしが必ず自分の父の家にいることをご存じなかったのですか。(ルカ 2:49)」と言われたように、いつも父なる神と共におられた、親密に交わっておられ、そして全幅の信頼を寄せていたことが分かります。

そして、「ゆだねる」という言葉は、前に置くという意味があります。それは、まな板の上の鯉のような、窮地に立たせられても慌てることなく、自分の身を相手のなすがままにさせているような状態なのだそうです。たとえ、それが闇の中に自分を投げ打つような時でも、それでも父なる神が自分を受けとめてくださるということです。「御手にゆだねる」と仰っていますから、神の主権の中にゆだねます。私たちが慌てる、あたふたとする、何か方策を立て、物事を動かしていこうとする、それらは自分の前に見える暗闇の中に入るのを、恐れているでしょう。しかし、このようにしてくださったのは神なのです、だから神に自分のすべてをゆだねれば、神が受けとめてくださいます。

この全幅の信頼があったからこそ、イエス様は人々の悪、その心の中の暗闇に左右されることなく、ただご自身のしなければいけないことについて神に従順になることができ、その使命を最後まで全うできました。

23:47 この出来事を見た百人隊長は、神をほめたたえ、「ほんとうに、この人は正しい方であった。」と言った。23:48 また、この光景を見に集まっていた群衆もみな、こういういろいろの出来事を見たので、胸をたたいて悲しみながら帰った。23:49 しかし、イエスの知人たちと、ガリラヤからイエスについて来ていた女たちとはみな、遠く離れて立ち、これらのことを見ている。

三つの種類の人々が、これらの出来事に反応しています。一つ目は、ローマの百人隊長です。

驚くことに、彼は異邦人であり、律法については無知であるはずですが、しかし、彼は神をほめたたえ、そしてイエスが正しいということ、死後に初めに証言したものでした。そういえば、イエス様の宣教の初めに、イエス様はある百人隊長の信仰に驚かれて、「このようなりっぱな信仰は、イスラエルの中にも見たことがありません。(7:9)」と言わしめるものでした。彼は、権威の下で動いているからこそ、神がイエス様を通してなされたことを認めることができた、とも言えるでしょう。

彼の証言した正しさは、言い換えると御父に信頼した正しさです。自分がいかに正しいかを主張する時に、人は疲れ、怒り、対立し、分裂します。そうではなく、神の正しさに自分を徹底的に従わせ、信頼を寄せるときにこのように、真実な正しさが現われます。正しいというのは、神の憐れみと平和と一対になっており、そこには癒しがあり、一致があり、へりくだりがあるのです。

そして群衆の反応ですが、「胸をたたいて悲しみながら帰っ」ています。この中で、イエスに十字架に付けろと叫んでいた人、また十字架に付けられたイエス様に罵っていた人はいるのでしょうか、分かりませんが、恐らくは混じった人々なのでしょう。ある人は罵り、ある人はすべてを見て、悲しみました。私達には、このように入り混じった人々がいるということを覚えていくことが必要でしょう。ある人は神の言葉を聞いていても、いつまでも従えずにおり、またある人はそのまま受け入れています。いつも、どちらかだけということはありません。

それから、遠くから離れて見ていた女たちがいます。興味深いですね、この女たちは静かに仕える人たちです。イエス様にいつも付いていて、従っているのですが、けれどもその中心部分に来て、意見を主張したりしません。人が言い争い、怒り、憎しみ、その罪と悪の巣窟のようにになっていたその場から、離れていました。けれども、イエス様から目を離していたのではなく、遠くから見ていたのです。すばらしい、静かに仕える人々の姿です。

#### **4A 新たに出てきた弟子 50-56**

そしてイエス様は、死なれた後にも影響を与え続けました。

23:50 さてここに、ヨセフという、議員のひとりで、りっぱな、正しい人がいた。23:51 この人は議員たちの計画や行動には同意しなかった。彼は、アリマタヤというユダヤ人の町の人で、神の国を待ち望んでいた。23:52 この人が、ピラトのところに行って、イエスのからだの下げ渡しを願った。

ヨセフという、ユダヤ人議会、サンヘドリンの一員です。彼は、この時に初めてイエス様に付いていることを明らかにした人物です。「アリマタヤというユダヤ人の町」という出身ですが、そこはサムエルの町、「マラタイム・ツォフィム(1サムエル 1:1)」であると言われています。ですから、霊的な遺産が受け継がれていたのかもしれませんが。そして、「りっぱな、正しい人」という評価ですが、これはイエス様がお生まれになる前後、祭司や敬虔な者たちが同じように表現されていました。ゼカリヤとエリサベツ(1:6)、エルサレムで赤子イエスを見て預言したシメオン(2:25)です。

そして議員たちの行動に同意しなかったとありますが、他にもニコデモがいました。ニコデモも同じように、「ヨハネ 7:51 私たちの律法では、まずその人から直接聞き、その人が何をしているのか知ったうえでなければ、判決を下さないのではないか。」と言った人物です。実は、「指導者の中にもイエスを信じる者がたくさんいた。(12:42)」と書いてあります。けれども、表にはその信仰は言い表さないうえです。ヨセフも同じようにしていましたが、今、イエス様の体の下げ渡しをピラトに願っています。

23:53 それから、イエスを取り降ろして、亜麻布で包み、そして、まだだれをも葬ったことのない、岩に掘られた墓にイエスを納めた。23:54 この日は準備の日で、もう安息日が始まろうとしていた。23:55 ガリラヤからイエスといっしょに出て来た女たちは、ヨセフについて行って、墓と、イエスのからだの納められる様子を見届けた。23:56a そして、戻って来て、香料と香油を用意した。

イエス様が葬られます。ヨセフが申し出なかったら、イエス様は他の囚人と共同墓地に投げ入れられていたことでしょう。けれども、一度も使われたことのない富者の墓に葬られたのですが、その意義は聖書の預言成就にあります。「イザヤ 53:9 彼の墓は悪者どもとともに設けられ、彼は富む者とともに葬られた。彼は暴虐を行なわず、その口に欺きはなかったが。」そして、女たちが香料と香油を用意します。安息日になるので、戒めを守ってその時は葬ったけれども、遺体に香料と香油を塗る時間がなく、それで三日目の朝に出かけていきます。こうして、彼女たちが十字架と墓を見た人々であり、かつ復活の最初の目撃者となります。

このようにして、イエス様の全うされた人生、それは「義」という言葉一つで言い表すことができるでしょう。正しく生きていくというのはどういうことか、それは従順と信頼の人生、自分を神以外のものにそらす、あらゆる状況に対しても、神の御心を全うされた人生です。